

## 近世社會と淨土教團

辻

賢

良

淨土教團の歴史に於いて、近世はその教團が齊宗、附庸宗の戒を脱して、諸宗に互する独立教團としての内容外觀を整備した時代であつて、知恩院に於いては宗門跡を奉戴して、皇室と特權の關係を結び、増上寺は徳川將軍家の菩提寺となり、本宗は將軍家と師僧關係を結び、更に内には宗侶養成の學林として十八極林を有し、増上寺は總録所として、行政の實權を握り、万余の本宗寺院を統括したのである。

斯くの如き教團の独立と發展は、中世以来列祖の布教伝道の方に依るものであるが、然し本宗教團が時の権力者たる徳川將軍と特殊關係を結んだ事によるのであつて、近世に於ける教團の大發展は、但に宗侶の求法伝導の信念の致すところである。だが徳川時代までの本宗の状況は全く齊宗の形態を脱する事が出来なかつたのであつて、寺院の如きは天台、真言の諸宗に屈するものが多く、淨土教團の如きも全く完備せるものなく、独立宗派としての面目は備はつていなかったりである。

此に中世社會の仏教改革運動より、近世社會の淨土教團の動きを歴史的に考察するならば、

中世仏教に就いては次の二つの事を考察する事が出来る。

第一に天台、真言の平安仏教が宗教として勢力な存在と化した。第二に末法思想の到来等であるが、その末法思想の到来は、仏の世を遠ざかるに従い、仏法は次第に衰えろと言う運命的な歴史観に外ならないが、此の過程を正法、像法、末法の三時説に区分され、最後の末法思想が此の破滅の時期にあたり、仏滅後千年乃至二千年に到来すると言うのであるから、平安朝はまさに此の時代であるが、平安末期の保元、平治の乱以来、平家の没落又鎌倉時代初期の安元の大火、治承の大飢饉、天災地変が頻発し此に人間の醜惡な一面を露呈すると共に、人の世の無常を痛感せしめるものがあった。此の様な非常な社会的不安を惹起し、祈祷本位の浄土教では、最早や之を救う方はなく、此に浄土教信仰が大きく浮び上つて来た。しかも十世紀末に叡山に出た源信僧都により、往生要集が編み出され、一般信仰者の指針とする等に成功し、後十二世紀後半、法然上人に取り上げられる事によつて、遂に浄土宗成立と言う偉大の成果を収めたのであるが、浄土宗成立より中世浄土教団を全般的に眺めて見ると、全く富家の形態を脱する事が出来なかつたが、足利氏に代つて、信長西上するに及んでその根拠を岐阜から安土に進め、安土の築城は天正四年の翌年に始られたり出来上り、その七重の天主閣は信長の威方を示し、堂々と湖國を圧して有名であるが、此にある有名な安土宗論が此の城下で天正七年五月二十七日に行かれた。元來信長は仏教に対して圧迫を加へた事で知られるが、たゞ誤も無く宗派を憎んだのではなく、山門は仏道を離れて武を弄び、悪僧の繁盛と化したためで、當時の社会秩序を亂したためであつて、悪僧は此を尊重したのである。当兩安土城下に於いても浄土宗の建立、又安土の八幡町に於いては安土引越しと称する寺院が、少なからず現存した。期の

有名な安土宗論は淨土院で行はれたのであるが、その発端は關東の淨土宗の眞譽上人が城下に  
来て法談した時、法華信者の蓮部、大脇の兩士が此を聞いて非難した。眞譽上人は此に応ぜず  
兩士の皈依する僧を出されるならは返答しようとしたので、眞妙寺日光、常光院日誦、久遠院  
日淵、妙興寺大芦坊、妙國寺普信等が此小を応じ、淨土側からは眞譽、眞安等の四人が相対す  
る争に成り、信長も親しくその席に臨んだが、結果は日淵等の奉行に宛てて、起請文を出す争  
によつて法華の貢とし、向後法論となさず又添状には、向後眞議なき争を誓はしめた。信長は  
「法華宗は口のすぎたる者に候」と云つたのは、法華に性する信長の感情を現している。此の  
宗論に於ける信長の態度は、日蓮宗の敵視で始終している。だが信長は宗論の危険性を警戒し  
て、政策上から淨土宗を庇護したのである。然るに信長に表はつて天下を統一した豊臣秀吉は  
、前者の失策を鑑みて反対に仏教擁護政策を行ひ、此の東争の現れとして秀吉が本願寺と握手  
したのが、天正十一年四月柴田攻めに始まるが、その後盛んに大坂に出入して信長に對抗した  
。本願寺の末寺に種々の符符を以て眞如（老佐）の夫人と香信を通じて、本願寺が京都に移  
つた天正十九年十月に眞如の遷化するや、此の本願寺北方と新門跡老壽（教如）とへ悔状を送  
り、總領たる老壽の弟光昭を移し、北方一所にあるべしと令している。老壽は此に本願寺が十  
二世の法燈を伝へたが、文祿二年の春自ら肥前に赴き秀吉を訪ひ發願の披露を告げた。同年閏  
九月秀吉は有馬湯治に赴いたが、如春尼は光昭と共に有馬に赴き亡父の意をなりと叙して、秀  
吉光昭を法嗣たらしむべく秀吉を説き伏せ、遂にその同意を得るに至つた。斯くして発表され  
たのが眞如の讓狀であるが、此れと不審の点があるが、老壽は母の意に背く事を畏れて秀吉の  
余に任せて、文祿三年九月職を弟に譲りて自から退隱したが、慶長五年七月家康老壽に復駁を

勤め翌大年八月伏見城に於いて、家康光壽相会し、七年二月に家康は鳥丸七條の地方四町を寄世堂宇を起して、老壽を此に復職さす事にし、此に本願寺は東西に分立するに至った。此の様に、日蓮宗、延壽寺、本願寺に対する秀吉の態度は、一種の反動政策と云へるが、秀吉が自動的に己の功業を記念すべく、大いに土木を起して伽藍を造営した方広寺の大仏を遂ぐる事は出来ないのである。

以上の如く信長、秀吉の宗教政策は必ずしも良策とは云えず、此れを總括して百年の計を立てたのが家康である。家康江戸に幕府を開くや、創立当初より仏教を保護し、諸大寺に寺領を寄せてその興隆を計ったが、その反面に於いて干渉判別を加へる事を忘れなかつた。压迫保護ばかりでなく保護干渉主義を取つたのである。又幕府の仏教に対する政治上の方針を示す物として、江沼度があるが、慶長十三年八月に比叡山に江沼七箇條を下したのを初めとして、その必要に応じて諸大寺に江沼を下した。斯くの如くに徳川時代に於いては仏教は非常に進歩発展し、此に我が浄土教に於いても独立教団として、浄土宗の優越性を發揮した時代である。徳川初期に於いて尊照上人、存心上人の出世に依つて徳川氏と關係を結び、増上寺の基礎を確立し、又徳川氏累代の縁政深さを以つて浄土宗に皈依し、時の増上寺の存心上人は家康の請に依じて、十念を授け師檀の妙をなし、寺領一千石を給せられる事に依つて、浄土宗としての内容外観を整備し独立教団としての特色を發揮したのである。文禄四年滿堂大僧正知恩院に於いて宗教を宣揚した。是れより滿堂上人、存心上人の二師が相談する事に依つて、此に浄土宗の綱格が制定した。綱格を制定する事に依つて発展の端緒は開け、慶長二年に制定された十八檀林の制、又宗憲三十五ヶ條を定める事に依つて大いに教勢を奨励し、此に宗教を宣揚したのである。

家康の天下統一により浄土宗は厚遇せられ、是れに於いて浄土宗としての基礎漸く固まり、教化は諸國に普及し徳川三百五十年に於いて法度、制規、政治はすでに軌道にのり、人民は安んずるに至り、宗教界も唯仏教の一法のみである争を以つて平穩無争で、各自は専ら教義の専攻と研究し、此を教化弘法する争によつて厄心を慰めていた。當時浄土宗に於ても最も多数の学匠が出る争に依つて、宗門は益々隆盛、学匠の輩出多く、宗門隆盛は實に諸宗に冠絶した。

だが本宗隆盛の偉業を立てられた満登→存応の興業と我々は決して忘れてはならないのである。

存応上人、貞蓮社源善慈昌と号し、天文十三年正月十日武蔵埼玉由木に生れ、十歳にして宝蓋寺蓮阿に投じて落髮し、十八歳の時増上寺感巻上人に隨寺して宗義を研究し、天正二年義に長伝寺を所さ、また大長寺に住して後同十二年、円也上人の許にあつて圖書を伝承し、増上寺第十二世の法燈を継ぎ、徳川家康の宗教甚だ篤く家康の請に應じて十念を授け師檀阿係を結ひ、寺領一千石を給せられる等によつて増上寺の基礎を鞏固ならしめ、宗門隆盛のために盡し、慶長二年に十八檀林の制を起し、又東憲三十五箇條を定めて教學を奨励し、以つて学徒教養の道場にあつて、浄土宗の優越性を發揮し、諸種の努を行つた。彼が如何に扶衆顕揚に努力したかは武成阿等を見れば判全とするが、國師は元和元年十一月二日七十五歳を以つて、入滅したが、彼の業績は枚擧に遑なく浄土宗今日の姿、優勢をなさしめたのは更に師、慶宗護法の熱意の結晶である。今彼の門下の偉才を擧ぐれば、節山、了時、了學は（増上寺十七世）、隨波（十八世）、吞龍上人（日快と対立、名声を上げ）は新田に大元院を創して名声をあげ、又慈本の源空寺開山興誓、深川の法禪寺開山心阿、深川の本善寺開山文興、桑名の照涼寺開山三甫、

予込の宗源寺南山及存、江戸崎の大念寺南山慶岩、三河の慈心寺南山休屋、相模岩瀬の大長寺  
第二世源栄、紀州光恩寺南山慈伝、筑前明禪寺南山存道、武蔵大松寺南山良阿、肥前報恩寺南  
山廓四、山城心光寺南山存栄等、醫師の門業からは多くの偉才が輩出し、此に宗門隆盛は實に諸  
宗に冠絶した。

最後に我々は近世仏教の成立を全般的に眺めて見ると、近世仏教に深い関係のあるのは、切  
支所の禁制であり、手段として切支丹を啓仏教に転せしめた。斯くて寺院と檀家の関係が成立  
したのであるが、即ち近世仏教は本末関係と寺祖関係との両制度の確立に依つて、その組織を  
見たのである。

本末関係も後になると次第に複雑となるが、本寺の上に総本寺があり、末寺にも直末、孫末  
等の階級が生じ、特別の事情で無本寺とあつたが、組織の根本は一貫して変らなかつた。

終